第一章　玉鬘の物語　養父と養女の禁忌の恋物語

［第一段　近江君の世間の噂］

　このごろ、世の人の言種に（ことぐさに、噂の種に）、「内の大殿の今姫君」と、ことに触れつつ言ひ散らすを、源氏の大臣聞こしめして、

　「ともあれ、かくもあれ、人見るまじくて（名家で育ったようでもなく）籠もりゐたらむ（田舎暮らしをしていた）女子を（をなごを、若い女を）、なほざりのかことにても（不確かな申し出にしても）、さばかりにものめかし出でて（自分の娘に祭り上げたのに）、かく（このように出来の悪い者として）、人に見せ（女房たちの目に付くようにして）、言ひ伝へらるるこそ（噂話に言い伝えられるなどという事は）、心得ぬことなれ（理解に苦しむ）。いと*際々しうものしたまふあまりに（ひどく気忙わに物を決め付けなさるあまりに）、深き心をも尋ねずもて出でて（詳しい事情も調べずに事を進めて）、心にもかなはねば（見込み違いだったとなれば）、かくはしたなきなるべし（こうした見っとも無いことになるのだろう）。よろづのこと（何事も）、もてなしからにこそ（遣り方次第で）、なだらかなるものなめれ（穏便に済ませるものだろうに）」　*「きはぎはし」は＜［形シク］物のけじめがはっきりしているさま。きわだっている。＞と大辞泉にある。

　と、*いとほしがりたまふ（今姫に同情する風を為さいます）。　*「いとほし」は必ずしも＜かわいそうだ、気の毒だ、同情できる＞という意味に直ちになるものではない、とこれまでも何度かノートしてきた。底意に＜悪い予感＞がある語で、この場合でも藤原殿に対して＜遣り方を批判する＞意味にもなり得るし、世情を＜憂う＞意味にもなりそうだ。が、「がる」の作為性の意図を考えると、殊更に＜今姫に同情してみせる＞源氏殿の計算高さが浮かび上がる。源氏殿は、基本的には対の姫を実の親の内大臣に引き合わせる心算なのであり、その際に、田舎育ちの対の姫を優れた京人に仕立てた源氏殿の功績を内大臣藤原殿に認めてもらう、という筋立てが源氏殿にとって望ましい。そのお膳立てとしては、実は、今姫が劣っているほど、対の姫の相対的価値が上がって、内大臣に姫を高く認めてもらえる可能性は増して、都合が良いのである。だから源氏殿は内心では、内大臣家今姫の田舎者ぶりや藤原殿の不手際は密の味であり、且つその家損に同情する立場なら、思惑通りに対の姫を内大臣家に紹介し易い、という次第だ。

　かかるにつけても（この噂を耳にするにつけても）、*げによくこそと（本当だろうかと驚き）、「親と聞こえながらも（内大臣を親と親しく思い申し上げながらも）、年ごろの御心を知りきこえず（普段の御気性を存じ上げず）、*馴れたてまつらましに（彼家で暮らさせて頂いていたら）、恥ぢがましきことやあらまし（恥ずかしい目に遭ったかも知れない）」と、対の姫君思し知るを（対の姫君が思い至りなさるが）、右近もいとよく聞こえ知らせけり（右近も同趣旨の話を姫によく言い聞かせ申し上げていました）。　*「げによくこそ」は下に＜我は此方に寄り侍りしか＞みたいな語が省略されている、という解釈を渋谷訳文はしているようだ。是を姫の心中文として「ほんとうによくこちらに引き取られて来たものだ」と言い換えられている。確かに是は文全体の意味からして説得力がある。が、「げによくこそ」を「あらめ」省略の＜本当によくもそんなことがあったものだ→本当にそんなことがあるのだろうか＞という意味の定型句、と見ることも出来そうだ。だとすると、対の姫の心中文括弧は「親と聞こえながらも」からではないのか。と、そうする。　*「馴れ奉る」は＜お近付き申し上げる＞という言い方で、「奉る」に＜参る＞の意味は無いから、訳文の＜お

側に参る＞は分かり易い言い方だが、意訳だ。かと言って、この＜お近付き申し上げる＞は非常に遠まわしの謙譲表現で、具体的な意味はこの言い方では分からず、原文でそういう言い回しをした当時の社会構造を含む言語体系を共有できない現代語に、この言い方のまま言い換えるのは、参考文に過ぎない‘逐語案’なる部材を、意味を移す仕上げ作業を怠ったまま、他の文とつなげてしまうという、多様な事故を誘発する手抜き工事になってしまう。さて、「馴れ奉る」はそれだけでは意味が通じない言い方であって、文意として＜内大臣家に住み慣れさせて頂く＞だろうと推論する。なので、左様に加工修正してハメ込む。

憎き御心こそ添ひたれど(殿は親代わりだというのに対の姫に言い寄るという、疎ましいお気持ちこそお持ちだが)、さりとて、*御心のままに押したちてなどもてなしたまはず(お気持ちの赴くに任せて無理に抱こうなどとは為さらず)、いとど深き御心のみまさりたまへば(最近はますます深い思い遣りばかりお見せになるので)、やうやうなつかしううちとけきこえたまふ(姫は殿を次第に好感して気を許し申し為さいます)。　*「みこころのままに～もてなしたまはず」は「御心こそ添ひたれど」をそのまま受けて＜気持ちはあっても無理強いは為さらなかった＞と言っているように見える。作者は、表向きには二人に情交は無い、という建前を崩さない。此処でも、そういうキレイゴトを言っている、とも見える。が、殿が姫に無理難題を振り掛けた記事はあったし、情交を強く窺わせる記事もあった。そして此処でも、「など」と含みを残している。「など」は＜打消しの意を強める副助詞＞の場合もあるが、であれば動作自体を「押し立つなど」と否定すべきで、「押したちて」と言うと＜押し立てた形で＞という意味になって、この「など」は類型を示す＜～のような＞という曖昧婉曲表現となる。となると、「御心のままに」は＜憎き御心を以って＞ではなく、殿の＜一方的な欲情だけで＞と読めるので、「御心のままに押したちてなど」は＜殿が気まぐれで抱こうというようには＞と読者が読む余地はある。そういう書き方を、この作者は意図した、と思う。

［第二段　初秋の夜、源氏、玉鬘と語らう］

秋になりぬ。　*初秋は七月。文月。2011 年の旧暦カレンダーだと、ほぼ一ヶ月遅れの新暦 7 月 31 日が旧暦 7 月 1 日(朔月)とある。

初風涼しく吹き出でて(夏とは違う風が涼しく吹き出して)、*背子が衣もうらさびしき心地したまふに(古歌に「背子が衣」とあるように、ふと愛する人の心が離れてしまうような物寂しい気分になり為さって)、忍びかねつつ(殿は忍んでも居られずに)、いとしばしば渡りたまひて(とても足繁く西の対にお出向きなさっては)、おはしまし暮らし(一日中そのまま過ごして)、*御琴なども習はしきこえたまふ(姫に六弦和琴などもお教え申しなさいます)。　*「せこがころも」は注に＜「わが背子が衣の裾を吹き返しうらめづらしき秋の初風」（古今集秋上、一七一、読人しらず）。＞とある。「せこ」は「兄子」とも表記され、女が夫や兄・弟などを呼ぶ語、とある。歌で言う「せこがころも」は＜夫の服＞。「うらめづらし」は、風で裾がめくれて裏地が見えた面白さと、夫の本心をふと考えてみた夏が過ぎた頃の情緒、なのだろう。「うら」は「裏」で＜内側＞で＜内心＞で、表向きとは別の側面を見る意外性の面白さ、驚き、喜び、悲しみ、と奥深い。　*「おんこと」は注に＜和琴をさす。＞とある。内大臣が名手とされている。

*五、六日の夕月夜は疾く入りて(いつかむゆかのゆふづくよはとくいりて)、すこし*雲隠るるけしき、*荻の音もやうやうあはれなるほどになりにけり。　*2011 年で見ると、旧暦 7 月 5 日に当たる新暦 8 月 4 日の月の出入りは(10：00 出、21：26 入)と、例によって舞鶴海洋気象台のページから引く。因みに太陽は(05：08 出、19：00 入)とある。「疾く入りて(早く沈んで)」とあるが、夜の 9 時半なら寝床に着いても変とは思

えない。確かに今なら、これから宴もたけなわという時刻かも知れないし、貴族は当時からそうした生活感に居たのかも知れない。ただ、もっと早い時刻でも、むしろ月齢5日の月明かりでは出ていても然して明るくはなかった、という事はあっただろう。　*「雲隠るるけしき」は＜月が雲に隠れた天気＞をいうことが多いのだろうが、此処では既に月も地平に落ちているのだから＜星も見えない夜空＞とも思えるが、「すこし」とあるので＜曇りがちな空＞で良いのだろう。　*「オギの音」は枯れススキと思っているもの、かも知れない。

御琴を*枕にて（練習に疲れて一休みするも、夜も更けたので御二人は、御琴を頭の方へ押し遣って）、もろともに添ひ臥したまへり（並んで横になってしまいなさいました）。　*「枕にて」は＜枕にして＞だ。が、枕にする、という言い方は、実際に何かを頭の下に敷くという意味の場合と、その方向に頭を向けるという意味の場合とがある。御琴は枕には出来ない。御琴の方に頭を向けて、だ。紛らわしい言い方をなるべく避けて、ついでに、この場面をより分かり易く補語してしまう。

*かかる類ひあらむやと（いい年をした男女が父娘ごっこをしているような、こんな類の話は他にあるまいと）、うち嘆きがちにて夜更かしたまふも（姫を横目に溜息がちに殿はそのまま夜更かしなさるが）、人の咎めたてまつらむことを思せば（女房らが御二人の仲を怪しんで噂を立て出すことを思えば）、渡りたまひなむとて（夜明かしはせずにお帰り為さることにして）、御前の篝火のすこし消えがたなるを（庭先の篝火が少し消えかかっているのを）、御供なる*右近の大夫を召して（殿の御供で対に付き従い部屋の外で控えていた右近大夫に命じて）、灯しつけさせたまふ（新たに薪を焚かせなさります）。　*「かかる類ひあらむや」は注に＜源氏の心中。『完訳』は「ともに臥しながらそれ以上の行為に出られないのが、類稀」と注す。＞とある。是に従って、この意を丸々補語する。　*「右近大夫（うこんのたいふ）」は注に＜右近衛府の将監（三等官、従六位相当官）、五位に叙せられた者。源氏の家人。＞とある。女房の通り名とは違って、この人物の実際の身分を示している、らしい。近衛府の組織序列は四等官制で、一等官（カミ）は大将（たいしゃう、従三位、総指揮）、二等官（スケ）は中将（ちゅうじゃう、従四位下、作戦指揮）と少将（せうしゃう、正五位下、作戦指揮）、三等官（ジョウ）は将監（しゃうげん、正六位上、実戦監督）、四等官（サクヮン）は将曹（しゃうそう、正七位下、部隊監督）、とのこと。ところで、「たいふ」は五位の昇殿を許された者の通称で「大夫」と表記する。が、「大夫」は中国の周代の官名で本部と現場を繋ぐ＜中間管理職＞を意味したらしい。近衛府の役職とすれば「将監」に相当する。なので、通常の右近衛府の三等官は「右近将監（うこんのじょう）」なのだが、五位の者が「将監」に就いた場合には「右近大夫」というようだ。ややこしいが、「右近大夫」といえば紛れも無く「右近衛府の五位の三等官」を示した、らしい。とのように出来上がった言葉なので言い換えようは無い。

いと涼しげなる遣水のほとりに（とても涼しそうに配した流水の近くの）、けしきことに広ごり臥したる*檀の木の下に（姿が殊に枝を横に広げたマユミの木の下に）、*打松おどろおどろしからぬほどに置きて（松の割り木を然程多くも無く置いて）、さし退きて灯したれば（建物からは少し離して灯したので）、御前の方は（庭先あたりは）、いと涼しくをかしきほどなる光に（涼しさもあり程よい光で）、女の御さま見るにかひあり（姫の女姿が目に美しい）。　*「檀」は「まゆみ」と読みがある。マユミの木は強くしなやかで弓にしたことから「真弓」とも表記される。また、和紙の原料にもなり「檀紙（だんし）」が作られた。多くは紅葉を楽しむ落葉低木だが、10m以上の大木になることもある、とのこと。　*「うちまつ」は辞書に＜松明（たいまつ）＞とあったが、訳文に＜松の割り木＞とあり、篝火用の焚き木としては分かり易い。

御髪の手あたりなど（髪の手触りなどが）、いと冷やかにあてはかなる心地して（とても清潔な上品さで）、うちとけぬさまにものをつつましと思したるけしき（衣服を乱さずに慎ましく気を遣

っていそうな姫の態度が)、いとらうたげなり(とても愛らしかったのです)。帰り憂く思しやすらふ(殿は去り難く眺めなさいます)。

「絶えず人さぶらひて(絶えず見回って)、灯しつけよ(火を焚き続けなさい)。*夏の月なきほどは(立秋前の晩夏の月の無い暑い夜は)、庭の光なき(庭が暗くて)、いとものむつかしく(とても気味悪く)、おぼつかなしや(不安だから)」　*「夏」は＜陰暦では、四・五・六月の称＞と古語辞典にある。段頭に「秋になりぬ」と明記されている。が、二十四節気の七月節とされる「立秋」までは夏の「暑中」であり、立秋から処暑までが「残暑」となるらしい。2011 年の新暦では 8 月 7 日が「立秋」とあり、旧暦カレンダーで見ればその日は 7 月 8 日に当たる。2011 年をこの物語に引くのは不当だが、当時でもこの日がぎりぎり「立秋」前だったとすれば、誤記には当たらないという際どさだ。取り敢えず、そういうことにして置く。

とのたまふ。

「篝火にたちそふ恋の煙こそ、世には絶えせぬ炎なりけれ　(和歌 27-01)

「絶えず灯せと乞ふ此火は、焦がすこの身が割りだから　(意訳 27-01)

*注に＜源氏から玉鬘への贈歌。「恋」に「火」を詠み込む。＞とある。「けぶりこそ」「ほのほなりけれ」の詠み方は＜死んでも思いは変わらない＞という言い方だろうか。「立ち添ふ乞ひ」は＜自然に引き起こされる＞で、それが「世には絶えせぬ(この世から無くならない)」という言い方からは、歌筋の＜煙たいのも面白い風情だ篝火に煙はつきものだから＞という余裕ある気分は丸で感じず、「こひ」の語感は＜熱意＞より＜執拗さ＞を感じさせる。殿は未練を滲ませた心算なのかもしれないが、パワハラ構図を思えば相当に気味が悪い。

*いつまでとかや(我ながら「いつまで」こうなのかと思いますが、)。ふすぶるならでも(古歌にいう「蚊取り線香のくすぶる火」ではないが、)、苦しき下燃えなりけり(辛い思いの「秘めた恋心」なのです)」　*「いつまで」「ふすぶる」「下燃え」という言い方については、注に＜「夏なれば宿にふすぶる蚊遣火のいつまでわが身下燃えをせむ」（古今集恋一、五〇〇、読人しらず）。＞が引歌との参照提示がある。

と聞こえたまふ(とお話なさいます)。女君(相手の女の方は)、「あやしのありさまや(また変なことになってきた)」と思すに(とお思いになって)、

「行方なき空に消ちてよ篝火の、たよりにたぐふ煙とならば　(和歌 27-02)

「空に消え去る篝火の、立てた煙の頼り無さ　(意訳 27-02)

*注に＜玉鬘の返歌。「篝火」「煙」の語句を受けて返す。『完訳』は「源氏の懸想をさりげなく拒んだ歌」と注す。＞とある。表意では、「消ちてよ」は＜消えてくれ＞と煙自体に言って、夜の庭の幽玄な風情を詠んでいる、のだろう。が、真意は当然、そんなあやふやな気持ちは捨ててくれという殿への訴えで、複意と言うのが似合わないほどはっきりと表現されている。この贈答歌双方の分かり易さ、というか、明快な意思表示は、思いを素直に言葉にしたからか、驚くほど古さを感じさせない。今の歌だ、とあっても普通に受け入れてしまいそうだ。

人のあやしと思ひはべらむこと(早くお帰りにならないと、女房たちが怪しがります)」

とわびたまへば(と困惑なさったので)、「くはや(これは、いけない)」とて、出でたまふに(廊下に出なさると)、*東の対の方に、*おもしろき笛の音(気になる笛の音が)、*箏に吹きあはせたり(十三弦琴に吹き合わせて鳴っていました)。　*「ひんがしのたい」は息子の左中将の住まい。舞台は未だ夏の町。　*「おもしろし」は＜心をひかれる。趣が深い。風流だ。＞と大辞泉にある。基本的には相手を褒める言葉ではなく、自分が興味を覚えたものをいうのだろう。下文先取りだが、殿は悪戯心が疼いたらしいので、此処では＜気になる＞として置く。　*「箏」は十三弦。今で言う琴。だが、「箏」の読みは「さう」で、ローマ字文では「しょう」となっている。誤記か。また、「吹き合はす」は笛同士で合奏するようにも思える。「笙」は「しゃう」だが「さうのふえ」ともあり、少し気になる。

「*中将の(中将のヤツが)、例のあたり離れぬどち遊ぶにぞあなる(いつも一緒の連中と合奏しているようだ)。*頭中将にこそあなれ(笛は頭中将なのだろう)。いと*わざとも吹きなる音かな(誰かに聞かせようとして、またわざとらしく吹いている音だな)」　*「中将」は息子の左中将。　*「頭中将」は内大臣家の長子たる右中将で、藤原宗家の惣領の定番地位らしい蔵人所の「頭(とう)」を兼任している、という明示だろう。が、例によって何の説明も無い唐突な初出の呼称だ。　*「わざと」は＜わざわざ、殊更に＞とある。現代語と同じだ。情緒に浸って吹く笛の音と、人に聞かせる心算で吹く笛の音は、やはり違うのだろう。特にそれで気を引こうとしているなら、むしろ違いを気付かせたい＜わざとらしい音＞を＜わざと＞出す。つまり、頭中将が対の姫を意識していることに殿が気づいた、ということだ。

とて、立ちとまりたまふ。

[第三段　柏木、玉鬘の前で和琴を演奏]

*御消息(殿は東の対に人を遣わして御伝言に)、「こなたになむ(今私は西の対の前廊下に居ます)、いと影涼しき篝火に(とても火影が心地良い篝火の明かりに)、とどめられてものする(引き止められたものだから)」とのたまへれば(と仰ると)、うち連れて*三人参りたまへり(息子は遊び仲間と連れ立って三人で遣っていらっしゃいました)。　*「せうそこ」は＜手紙＞である場合が多いが、基本的には＜お知らせ、近況報告、事情説明＞で、この場合は＜伝言＞だろう。　*「みたり」は注に＜夕霧、柏木、弁少将をさす。＞とある。源中将 15 歳、頭中将 21 歳、弁少将は根拠は薄いが 18 歳、因みに源氏殿 36 歳、内大臣藤原殿 42 歳、対の姫 22 歳、弘徽殿女御 19 歳、藤二姫 17 歳、近江君は不詳だが政変絡みだとすれば朱雀帝の即位前後の出生と見て、朱雀院現在 39 歳で即位が 24 歳だと 15 年前の生まれで 15,6 歳、なお今上帝は 7 年前の即位で現在 18 歳、秋好中宮 27 歳、紫の上 28 歳、明石姫 8 歳、明石君 31 歳、くらいと見ている。

「*風の音秋になりけりと(「風の音で秋の到来を知った」と古歌にあるように)、聞こえつる笛の音に(風に乗って聞こえてきた立秋を知らせる笛の音に)、忍ばれでなむ(情緒を煽られて、じっとしていられないのでな)」　*「かぜのおと」は注に＜「秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる」（古今集秋上、一六九、藤原敏行）。＞を引くとある。例によって「古今和歌集の部屋」サイトの当該ページを参照すると、この歌は「秋立つ日よめる」と詞書があり、解説にも＜この歌は秋歌上のはじめの歌で、詞書にもあるように立秋の日の歌である。＞と記されていて、いかにも引くべき歌に見える。

とて、御琴ひき出でて(殿は部屋から縁側に和琴を運び出させなさって)、*なつかしきほどに弾きたまふ(静かな調子でお弾きになります)。源中将は、「*盤渉調」にいとおもしろく吹きた

り(「盤渉調」のうらさびしい笛の音を御琴との相性を良く心得てお吹きになります)。　*「なつかしきほど」は＜懐かしい感じ＞という言い方に見える。が、そうだとすると何を言っているのか分からない。また、是を言葉の上で少し工夫して＜秋の情感豊かに＞とか言ってみても、やはり分からない。何が分からないのかと言えば、実際にどういう演奏だったのかが伝わって来ない、ということだ。勿論、和琴自体を知らないし、その演奏方法や当時の音楽の在り様を知らないのだから、どう言われても具体的な形は分からない。逆に、当時の宮廷読者は具体的な形を知っていたから、こういう書き方でどういう演奏だったのかを理解できたのかも知れない。が、それでも、現代人のこんな私でも、この場面を考える何がしかの手掛かりは欲しい所だ。で、残る拠り所は語感だ。「なつかし」という気持ちの状態は、新しいものに触れる興奮とは違って、自分を見つめ直す穏やかな姿勢、かと思う。で、＜静かな調子＞とする。　*「盤渉調」は「ばんしきてう」と読みがある。「盤渉(ばんしき)」は＜雅楽に於ける十二律の一つで、西洋音階のロ音(B)に近い＞とあり、「盤渉調」はその「盤渉」を主音とする音階律と古語辞典にある。また Wikipedia には西洋曲調でいう Bm ともある。ということは西洋音階の調性で考えれば、和琴が Dmajor に調弦されていて、その開放弦の弾き流しに、Bminor 旋律の曲を笛で吹いた、と見て良いのだろうか。ただし Wikipedia にも解説されているが、雅楽は様式として古来から継承されている要素は多いが、理論的に統一されて継承されたものではなく、歴史的にも応仁の乱(1467～1477)で京が荒廃して権威筋も一時途絶えたとあり、この物語の平安期の音楽を相応な裏付けを持って説明できるものは無い、らしい。それに、西洋音階や西洋音楽といっても、その汎用性は 16 世紀以降のピアノ製作の技術的開発に伴う理論構築によってもたらされたものであり、応仁期を含む室町幕府時代は西洋のルネサンス期に当たり、西洋という世界概念のもとに統一基準の模索が意識され出した時代であり、それ以前の音楽は各地域や各部族ごとに技法や理論の継承はあっても、統合されたものとしては存在していなかったのだから、この物語当時の 9,10 世紀の日本や東アジアの音楽を説明できる概念では元々無い。とはいうものの、その反面、現代の日本人としては西洋音階に代表される一定の共通音楽概念らしきものを手掛かりにする以外に、この文を読む方法が無い。つまり、分からないのだ。で、強引に独断する。およそ管楽器は管(くだ)であり筒(つつ)であり、その形状や材質によって鳴り(倍音共振成分割合)が異なる。それ自体の鳴りの良さに従えば、オクターブやピッチにとらわれず長さや太さが決まってくる。そのように出来上がった楽器はクロマチックのような半音小細工の器用な技法も不要で、独特の音階を持つ楽器となる。統一が便利だという商人発想は人類に豊かさをもたらすが、それがなくても人間は生きていたし、まして他の動物は多様に生きている。街中でも時に複数の鳥の鳴き声が同時に聞こえて、その全体の空気感を楽しく感じる事がある。オーケストラの調音ポリフォニーがどんな曲より好きだという人も居るだろう。生きていること自体が基本なのは自明だ、とはこの物語の作者の主要命題でもありそうで興味深い。また、弦楽器もそれ固有の倍音共鳴成分があって開放弦こそが最も豊かに響くのだろうが、弦は楽器が出来上がった後でも太さや長さを容易に変える事が出来る。となると、音を変えること自体がその楽器を演奏する楽しみになったりもするのだろう。また、弦の長さで音程が変わるという作業のし易さは、数学式の音階概念も理解しやすい。数学は汎用性の高い論理方法で、多くの人の共通認識を形成しやすい。多くの人が共通認識を持つことは、英知の結集を促し便利で豊かな社会形成に寄与する。が、必ずどこかで多様性をそぎ落とす。が、多様性は日々また生まれる。失われたものは戻らないかも知れないが、未来が無くなった訳では無い。今はそう思うしかない。いや、大震災の余震が続いているから言うのではない。ユニバーサルは不可逆反応だ。その上で多様性を育てる、というのが現実だ。ユニバースは理想ではない。基準概念だ。それこそ音楽が分かり易い例だ。例えば、譜面どおりの機械演奏があったとして、個人でも複数人でもがそれに合わせようとするとして、相当合ったとして、必ずズレる。だから面白い。共通認識があって、それに合わせようとする協調姿勢は先ず必要だし、その帰属性は社会性であり自分も安堵できるし、傍目にも理解しやすい。しかし、基準に対する個人の解釈は生命体の物理的生理的特性に依らざるを得ないので、機械演奏のパラメーター設定をどんなに項目を増やして細かく目盛っても、いやそうすればするほど汎用性は失われ客観基準ではなくなるが、その個体特性とは一致しない。で、それを面白い

と人間社会は感じ続ける、と信じたい。いやだから、この場面での貴人たちの演奏がポリフォニーとは別の概念のバラバラ演奏だったとしても、やはり一定の合奏様式はあったのだろうとは考える。そう言えば今更ながらだが、この物語で「遊び」は＜管弦の演奏をすること＞だった。と要するに、中身は分からないから言葉を理屈の上で言い換える。と、「盤渉調」という言葉は先の上文の「背子が衣もうらさびしき心地したまふ」から＜「うらさびし」い調子＞と引いて、「いとおもしろく」を＜(合奏様式を)よく心得て＞と意訳する。

頭中将、*心づかひして*出だし立てがたうす(姫に聞かれるのを照れて声を出す思い切りがつきません)。　*「こころづかひ」は＜気遣い、配慮＞そして＜用心＞とある。この場面は西の対の御前近くの縁側だ。藤中将が気になるのは、殿や左中将ではなく対の姫君に違いない。だから＜気遣う＞ではなく、姫の前での失態を恐れるあまりに＜臆す＞だろうし、この場の軽さを見れば＜照れる＞だ。　*「いだしたつ」は＜送り出す。出立させる。差し向ける。＞とある。ところで、「出だす」は＜出す＞の他に＜口に出す、歌う＞とあり、より広く＜実際に動作を始める、行う＞とも古語辞典に説明される。「立つ」にも＜始める＞の意があるが、語感では＜表す、表明する、決心する＞の意味合いが強い。そして「難し」は「立つ」に掛かるから「出だし立て難し」は＜上手く歌えない＞のではなく＜声を出す決心がつかない＞のだ。いや、何が言いたいのかと言えば、「出だし立つ」は＜声を出し始める＞という意味はあっても、それだけで＜歌を歌い出す＞という意味にはならない、ということだ。いや、頭中将は歌を歌った。それは下文に「二返りばかり歌はせたまひて」とあるので確かだ。しかし、この文で頭中将が歌を歌うことになっていた、と何処に書いてあるのか。それが「風の音秋になりけりと、聞こえつる笛の音に、忍ばれでなむ」という殿の言葉に在ったのだ。つまり、この殿の「忍ばれでなむ(じっとしていられないので、私も一緒に弾こう)」という言い方は、頭中将に＜だから貴殿は「秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる」という藤原敏行の歌を此処で歌って、部屋に居る姫を「おどろか」せてやりなさいな＞と悪乗りした、という場面の文章なワケだ。それで、そうか。だから作者は、源中将の笛をわざわざ＜「盤渉調」に＞という言い回しにしたワケだ。いや、「盤渉調」自体は良く分からないが＜心寂しい調子＞ではありそうで、対の姫への恋に悩む頭中将の歌をお膳立てするには実に＜良く心得た＞ものだという洒落口調になっている。誓って言うが、「いとおもしろく」を＜よく心得て＞と言い換えたのは此処の文を考える前で、音楽上で一定の演奏様式が在ったに違いないという推論から導いた言葉で、我ながら文意と言葉の整合性に今になって驚いた、という次第。縦横一致で、ズバリ御名算という気分。いやしかし、最初からこの文脈に気付いていれば、殿の「なつかしきほどに弾きたまふ」も、源中将の「いとおもしろく吹きたり」も言葉遊びの気分を味わえたのかも知れない。惜しいことをした。だがしかし、やはり一度は当時の演奏形態を、結局分からないながらも、改めて分からないと認識するだけでも、考えてみることが、この文章を私が味わう意味なのだろう。

「遅し」とあれば(殿から「遅いぞ」との御声があったので)、弁少将、拍子打ち出でて(拍子板を打ち鳴らして)、忍びやかに歌ふ声(静かに歌う声は)、*鈴虫にまがひたり(鈴虫のようでした)。二返り(ふたかへり、二度)ばかり歌はせたまひて、御琴は中将に譲らせたまひつ(殿は和琴の演奏を藤中将に御譲りなさいました)。げに、かの父大臣の御爪音(おんつまおと)に、をさをさ劣らず(少しも劣らず)、はなやかにおもしろし(明瞭で良い音です)。　*「鈴虫にまがひたり」は歌に対する褒め言葉なのだろうか。からかっているようにも聞こえて、元々どんな音楽かが分からない私には実感がつかめない文だ。鈴虫を愛でる価値観からすれば褒め言葉なのだろうとは思うが、「忍びやかに歌ふ声」もこの場面に即して歌い手の判断でそう歌った、というよりは気後れしながら遠慮がちに歌ったような文脈に思えてしまう。だから、もしその歌い方がこの場面に見合っていたのなら、例えばビートルズの「サン・キング」のように曲調自体にその風情があってのことだろうとも思え、その選曲は伴奏を始めた殿と源中将がしたもので、その曲がこの場に相応しいという意味で「鈴虫」を持ち出したようには見えるが、「歌ふ声」を褒めるなら「をかし」と言うべきではないだろ

うか。つまり、私にとっては「歌ふ声(いとをかしく)鈴虫にまがひたり」となっていれば、歌の上手さと曲の風情の良さが表現された分かり易い文だった、ような気がする。

「御簾のうちに(部屋の中には)、*物の音聞き分く人ものしたまふ*らむかし(演奏の良し悪しを初め、聞きつけた話で何でも分かってしまう人がいらっしゃるでしょうからな、)。今宵は、盃など心してを(深酒には気をつけないと)。盛り過ぎたる人は(呑み過ぎると)、酔ひ泣きのついでに(泣き上戸になって)、*忍ばぬこともこそ(余計な愚痴まで言ってしまう)」　*「もののねききわく」は＜演奏の良し悪しが分かる＞だが、その言い方に掛けて＜聞き耳を立てる＞のような軽口を言っているのだろう。　*「らむ」は現在事象の理由推量の助動詞。だが、此処では不確かな推量でなしに当然の予測なので、その少し問題がありそうな‘壁耳’事態を＜だけど、しょうがない＞みたいな語感で余裕を持って許容するかの態度を誇示する揶揄や自嘲や皮肉交じりの言い方で、多くは軽口だろう。また、「かし」の「か」は＜不確かさ＞を示す係助詞で、それが文意によって＜疑問表現＞になったり＜反語表現＞になるが、話し相手の気持ちに＜不確かさ＞がある場合に＜同意を求める表現の「な」＞となる、ようだ。「し」は話し手自身の意向の念押しの＜～だし＞で、「かし」は＜～だしな＞となる。なお、この文は意味としては「今宵は、盃など心してを」の理由説明なので倒置法の書き方になっており、「らんかし」は＜～だろうからな＞との言い換えとなる。　*「しのばぬ」は＜「忍び(秘密にする)」「成らず(出来ない)」＞を縮めた「しのばず」の連体形で＜秘密にし切れない＞という言い方、かと思う。ただ、此処では「酔ひ泣きのついでに」とあるので、「こと」を＜泣ける思い＝愚痴＞と考えて、「しのばぬ」は＜言うべきでない＝余計な＞とした。こういう言い方は貴公子たちを前にして、いかにも一般論のような言い方だが、源氏殿のこの場面での＜泣ける思い＞は＜姫君への横恋慕＞なのだろうし、貴公子たちどころか余人を前にしては＜余計な愚痴＞どころか、一切その気配すら決して口に出来ない秘密ではある。つまり、形の上では貴公子たちに向かって話しているが、殿の真意は姫に未練を訴えている、という場面。

とのたまへば、姫君も*げにあはれと聞きたまふ(姫君もこの貴公子たちを前にして内大臣家の方々ならとつい打ち明けてしまいそうな事柄ということでは思い当たることが数々あって殿のこのお言葉を、実に感慨深くお聞きになります)。　*「げにあはれ」と姫君が聞いた殿の言葉は「忍ばぬこともこそ」だ。殿が言う「忍ばぬこと」が＜自分への恋心＞だということは、姫は当然に気付いただろう。しかし姫はその殿の思いには同調しない。姫は「忍ばぬこと」の言い方が意味する＜秘密にしきれない思い＞に、この右大臣家の人を前にした場面で、自分なりの＜出自を打ち明けたい思い＞を代入して、殿とは別の意味で感じ入った、のだろう。それが、「いと」ではなく「げに」と語る意味かと思う。

絶えせぬ仲の御契り(離れていても切れない実の姉弟という御縁は)、おろかなるまじきものなればにや(掛け替えの無いものなので)、この君たちを人知れず目にも耳にもとどめたまへど(姫は二人の藤原兄弟の姿を内心深く目と耳に焼付けなさったが)、かけてさだに思ひ寄らず(事情を知らぬ藤原兄弟の方は、少しもそんなことには気が回らず)、この中将は、心の限り尽くして、思ふ筋にぞ(恋路一筋に)、かかるついでにも(この機会に何としても)、え忍び果つまじき心地すれど(打ち明けられず終いにはすまいと意気込んだが)、さまよくもてなして(嫌われるのを恐れて、澄まし顔のまま)、をさをさ心とけても掻きわたさず(いつまでも寛いでは一曲弾き通す事が出来ません)。

(2011 年 4 月 19 日、読了)